

映画と私

久津正行 S26 経済

顧みると映画は、文学、美術、音楽、舞台芸術、建築など悠久の歴史の流れの中で進化してきた芸術と比べ、未だ 100 年余りの歴史しかないので、今年米寿を越した私にとっては、同時代と一緒に歩み進化してきた身近な総合芸術なのである。



はっきりと記憶に残っている最初の映画は、昭和 6 年頃、麻布の住居に近い芝園館という映画館に両親に連れて行ってもらって観た「第七天国」という素晴らしいアメリカ映画であった。映画といっても、未だ活動写真の時代で、黒白のサイレントで、弁士が職業として活躍していた。7 階の屋根裏にも、貧しくても素晴らしい

人生がある事を映画が目覚めさせてくれた貴重な一日であった様な気がしている。大袈裟であるが、正に“三つ子の魂”の様なもので、未だちゃんとした文学、美術、音楽などに出会う前に、この活動写真は、「人間と人生」を私に教えてくれた。

戦前とは云うと、如何にも軍国主義の暗い時代と受け取られがちだが、昭和 6 年頃から 16 年頃までの約 10 年、実は文化的に豊かな時が流れていたのである。

ひたひたと感じる世界不安の一抹の翳りはあったが、明治からの西欧文化の受容も熟してきた頃で、映画の世界も華麗な饗宴のようにつかの間の花が開いた。「モロッコ」、



「パリの屋根の下」などを観ては、伝統や優雅な風俗に目を見はり、才能豊かな監督や多彩な俳優陣に魅了された。



「巴里祭」のルネ・クレール監督、「望郷」のジュリアン・デヴィヴィエ監督、「ミモザ館」のジャック・フェーデ監督等の名作を追う中で、華やかに、

アナ・ベラ、マリー・ベル、フランソワーズ・ロゼー、ダニエル・ダリユー、ジャン・ギャバン等のスター達が次々に誕生する。何れも文学性豊かに、人生の哀歓を謳っていて心に響くものであった。

昭和 17 年に、幼馴染みでもある従兄弟たちが映画研究「映像会」を立ち上げ、月刊誌発行や、随時集ま



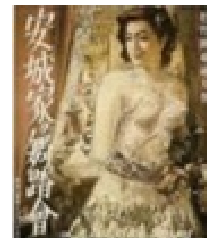
っては映画論を闘わしていた。全盛時には 40 人もいたこの会は、紆余曲折を経ながら、戦後参加した小生を加え今も 3 人で継続している。

この間、日本映画も音声という新しい技術を得て一段と深みを



増し、多くの秀作を世に出した。山中貞雄や稲垣浩の時代劇、溝口健二のリアリズムの「祇園の姉妹」、田坂具隆の「路傍の石」、豊田四郎の「若い人」、吉村公三郎の「暖流」などの現代ものが都会文化形成をリードすると共に映画ファンが定着した。と同時に次代を担う小津安二郎、黒沢明等の作品も出てきた楽しみを受け止めていたのである。

第二次大戦の4年間は正に映画にとっての暗黒期だった。昭和20年は焦土化した本土とGHQの縛りで映画どころではなかった。軍事力のない日本の敗戦は納得せざるを得なかったが、「文化力」とも云うべき日本人の向上心は衰えず復興の糸口となり、映画も、昭和22年頃には、「待つて



ました」とばかり秀作を続出。「わが青春に悔いなし」とか「安城家の舞踏会」とか、

戦前の昭和文化はかくして再び花開いて行った。
堰を切るように洋画が入って来た。「我が道を往く」、「カサブランカ」、「キューリー夫人」など。貪るように観たそれらには人間の果敢な生き方が描かれていた。なんで戦争なんてしたのだろうと思わざるを得なかった。

20世紀後半の世界はアメリカが主役になり、映画もハリウッドという映画の殿堂に国の内外から沢山の才能が集まって来た。

そこは発想と技術を学び合い、又競い合う聖域となって、<我らの生涯の最良の年>のウィリアム・ワイラー、<失われた週末>のビリー・ワイルダー、<駅馬車>のジョン・フォード、<我が家の楽園>のフランク・キャプラ、<断崖>のヒッチコック、<ジュラシック・パーク>のスピルバーグ等何れ劣らぬ俊英達が、幸せなアメリカン・ドリームを描く一方、サスペンス構成で人間の性を抉りだして、高度社会の光と影を映像の上に残してくれた。アミューズメントとして映画はダイナミズムを存分に発揮して来たのである。



又他方戦後のイタリア映画も忘れる事が出来ない。ネオレアリズムと呼ばれた、<無防備都市>のロベルト・ロッセリーニ、<靴みがき>のヴィットリオ・デ・シーカ、<ヴェニスに死す>のルキノ・ヴィスコンティ、<道>のフェデリコ・フェリーニ達は、人間社会の負の部分赤裸々に描いて、ローマ文化のDNAを感じさせ乍ら、アメリカ映画とは異次元の質の高さを示してくれた。



この間、高度成長をまっしぐらに進んだ日本の環境の中で、日本映画は、「生きる」「羅生門」「七人の侍」の黒沢明、「東京物語」「晩春」「麦秋」の小津安二郎、



「雨月物語」「西鶴一代女」の溝口健二、「二十四の瞳」の木下恵介、「浮雲」の成瀬巳喜男等の秀作が相続き、文化の高さを世界に見せてくれた。

今年春ある英国誌が世界の監督のトップに選ばれたのは、「東京を世界のインテリジェントは理解

さて戦後から 60 年経った今、デジタル時代のグローバル展開はも映画製作をしているお陰で未知



300 人による投票で世界映画史のベストテ
物語」であると報じた。この静謐なテーマ
しているし日本文化受容の証左と云えよう。
術の進歩によって映画は益々多彩になり、
目を見張るものがある。今や多くの途上国
の世界のメッセージを映像でみる事が出来

る。どんな所にも掛け替えのない人生が存在する事が判る。楽しみは尽きない。

(平成 26 年 3 月 20 日)